



散歩の帰りによく通る道がある。八道と呼ぶほどの幅のある道路ではないのだが、広いバス通りと、それに平行する一本北側の道とをつなぐ長さ百メートル足らずの通路である。車の一方通行の表示もない、長さ百メートル足らずの道である。

ただ、両側に人家が並ぶのではなく、一方は近くにあるスーパーマーケットの広い駐車場であり、反対側には金網で囲まれた有料の自転車置場が広がっていたりしているため、あまりせま苦しい感じは受けない。駅の方から歩いて来ると、そのゆるい下り坂の小道に自然にはいりたくなくなる理由がある。そこがなだらかな下り坂となつていて、ハンドルをしっかりと握らなければならない。買物車や椅子を押したりしている時などは、ハンドルをしっかりと握らなければならない。息づける場所なのである。

先日の午後、駅の方から歩いて来て、そのゆるい坂道にさしかかった。歩いている右肩のあたりが、なんとなく背後から何かに押されたような気がした。右の肩あたりを後ろから軽く叩かれたような気がした。後ろから来た白い小型乗用車が音もなく迫っていた。慌てて右手をあげて初老のド

運転者と心通う坂の小道

音をめくる日



絵・木村彩子

ライバーに挨拶し、相手はゆつくり頷きながら車を滑らせた。おそろくドライバーは道の傾斜を知っており、エンジンを切ったまま坂にはいつたものと思われた。あそこいきなりクラクションなど鳴らされたら、こちらには驚いたことだろう。

その後、同じようなことを同じ場所でも重ねて経験した。こちらの肩をこするようにつけて近接し、追い抜いていくドライバーに、どうも失礼と手をあげて挨拶すると、相手のドライバーは片手をハンドルのドラッグを近づけて来た。それに気がついたので道の右側に寄ろうとした時、車の運転席の窓がいて、低い男の音が、はい、夕食のお届けに参りました、と独り言のように低い声が軽四輪車の半開きの扉から聞えているのに気がついていた。宣言するのでもなく、ほとんど咄くような低い声が車のどこから洩れていた。追い抜いた車が道の脇に止って後ろの扉を開けると、薄水色の食べ物のケースが荷室内に低く積まれているのが外から見えた。温かそうな景色が目には浮かんだ。

こんなこともあった。雪の降った翌日、道に積った雪を気にしながら散歩に出た。ほとんどの雪は屋間の陽光で溶けていた。ある道を曲ると、日当りが悪かったか、そこには半溶けになった雪が道端にかなり残っていた。小型トラックが前方から走って来た。若いドライバーだった。溶けかけた雪の水をこちらのスポーンに勢いよくかけて走り去った。

「去る」



黒井 千次

狭い小さな庭でも、少しばかりの庭木があるだけで大やがて来る。花見に来る。木の実をつつ・ユズ・グレープフルーツ。小枝に羽根が残されている。

にほんご

NIHONGO

別れがなくて、べつにそれはそれほどなになにではなくて、ここに春といつか冬でなくなるスキー靴を履いたさいこの口クマが。よほど、冬が、春にみえていまは、記入することが多く、串にでも刺して、眠りたいのだよ。ヨ

それから、布団を干したい。

今日はすく風がすく、すく、すく、などの事情をグミ(もしくはラムネ)を食いながら、窓で『思う』ペリカン(猫の移動)の冬眠を、防ぐ半分。食器と食器棚の冬眠を、防ぐ春たつてつかいますからね

壁(ひ、だ)が、カセットテープに吹き込む、側転するものは。夜(トニー)

ラムネ『淡あわごー』の春眠

芦川 和樹

電子レンジであれ、フォークであってもマスカット。に類似して、肩入れして、悲しさがなくて、オットセイがカムテープで作った吹雪の模型が、なにになになになになに。思ってもいいし、桜が、遅い桜で、ストロベリーを夢みるんだってほごびが、まったく知らない接続を生み出した。かまくら(雪のやつです)に、しまっておいてどこかで春に、なったら。なったら淡あ、わごーのこの内臓である。元気が

あしかわ・かずき 1989年生まれ。2023年に現代詩手帖賞。同年、詩集『犬、犬状のヨーグルトか机』(思潮社)を刊行。

*『にほんご』は毎週土曜日掲載。

方言探

「兄」の言い方

各地「物類呼」の「兄」の項には「越後にあんにやさ、東国にてせな、出羽にてあんこ、奥ノ南部にてあいな、九州にてはほう、備前にて親かた、土佐にておやがたち」などと多くの方言が載録されている。

実はこれらの多くは現代の方言にも残っている。

「兄」の変形「あん」が付いたのが「あんにやさ」、「兄」に「嫁つて嬢つ」など親愛の情を添える「こ」が付いたのが「あんこ」だ。

「せな」は古くは女性が男性を親しんで言う語だが、後に「兄」を指すようになった。

「おやかた」は「親方」で、東北のほか、中国、四国、九州の一部で使われる。高知の



画 成田昭昭

篠崎晃一・東京女子大学教授

奥能登復興に文化財必要



石川県珠洲市の塩田は地震でひび割れ、海岸も隆起して奥能登の環境は一変した(2月撮影)

能登半島地震で被災した奥能登地域は民俗文化財の宝庫でもある。地震で傷ついた文化財の復興を急ぐ必要がある。過去の災害で文化財レスキューに携わってきた国立民族学博物館(民博、大阪府吹田市)の日高真吾教授(保存科学)に語ってもらった。

日本書紀にも登場する能登の国は、古代から当時の最先端の生業があった。代表的なものに今も石川県珠洲市で行われている揚げ塩式製塩があり、塩作りに必要な鉄釜を作る鑄物産業が盛んだ。輪島塗などの

美術工芸が栄え、キリコ祭りに代表される民俗芸能も活発だ。半島という地理的特性から様々な文化が流入・凝縮し、独特の文化が形成された地域と言える。

一方、日本における文化財研究のさきがけとなった地域でもある。民俗学や言語学、考古学など人文系の学会が組織した「九学会連合」が戦後、いち早く能登地域を全



日高真吾教授

日高真吾・民博教授 がれき撤去待たず 屋外から



文化

数調査して貴重な文化財のリストが作られた。今では国指定や自治体指定文化財になっているものも多い。自分自身と能登との関わりは、1996年に揚げ塩式製塩用具の保存修復技術開発の一環として、珠洲市で調査したことに始まる。2007年に発生した能登半島地震では、被災した文化財の支援をし、より関係性が深まった。この時は、六水町指定文化財「明泉寺台燈籠」が倒壊し、民博の主導で修復に向けた設計・監修を行った。10年に修復が完了し、民博が現地に戻った後もメンテナンスに関わっている。昨夏には金沢学院大の学生にも協力してもらい、さび止めなどをしたところだった。

初期のレスキュー作業が完了すれば、本格修復の段階に入る。阪神大震災や東日本大震災などの過去の災害を経て、地震や津波で被災した文化財の修復技術は、日本では世界でトップクラスにある。地域の復興に文化財の存在は欠かせない。長期的な活動になるが、これまでの知見を生かし、能登の文化復興に貢献したい。(聞き手・多可政史)



能登町中を巡回するキリコ(2018年撮影)。祭りを再開できるかも課題だ

戦禍の文化財保護に協力



ロシアの侵略によって、ウクライナの歴史的建造物や出土品の被害が深刻化する中、奈良文化財研究所(奈文研、奈良市)が現地の研究者とネットワークを結び、文化財を保護する活動に乗り出した。文化庁からの受託で、日本の民間企業と連携し、爆撃の振動から貴重な土器を守る保存ケースなどの提供をサポートする。

ウクライナにケースなど提供



奈文研、民間と連携 国連教育・科学・文化機関(ユネスコ)によると、ウクライナでは127の宗教施設や154の歴史的建造物など計346件(いずれも3月13日現在)の被害が報告されている。爆撃によって収蔵庫の棚から文化財が落下し、破損するケースも後を絶たないという。

奈文研国際遺跡研究室の庄田慎矢室長は「戦争が終わってからの文化復興では手遅れになる。日本から何かできないか」と考え、1月にウクライナ科学アカデミー考古学研究所の研究者ら3人を日本に招いた。被害の実態を聞き取り、必要な支援のあり方を話し合った。

研究者らの話では、木造教会が壊され、考古資料が持ち出されるケースもあり、収蔵品を国外に退避させるにも輸送手段や人手が不足しているという。研究者の一人は「このままではウクライナの文化が破壊される」と危機感を募らせていた。

これを受けて奈文研は、発掘調査や展示用機器の製造販売会社「第一合成」(東京都)に協力を求め、研究者らとともに同社を訪ね、同社は、揺れに強い台車や収蔵棚から落下を防ぐヘルルトなど文化財を守る製品を開発しており、文化財が劣化しにくい中性紙製の保存ケースなどを提供した。

同社の生部裕介・営業部長は「今後は現地調達できる材料で防災グッズを製造するノウハウも提供できれば」と話す。庄田室長も「現地のニーズを把握しつつ、日本の特色を生かしながら文化財保護の支援を続けたい」としている。